



**Blue  
Planet  
Prize  
2019**

2019年(第28回)ブループラネット賞  
受賞者 取材抄録

---

ジャレド・ダイヤモンド教授

公益財団法人 旭硝子財団  
THE ASAHI GLASS FOUNDATION

## ジャレド・ダイヤモンド教授 (米国)

### Prof. Jared Diamond



進化生物学者 生理学者 生物地理学者  
鳥類学者、歴史家、作家  
1937年9月10日 米国 ポストン生まれ  
カリフォルニア大学ロサンゼルス校地理学部教授

#### 子ども時代

##### 幼少期

私は1937年にアメリカのポストンで生まれ育ちました。両親と1歳半年下の妹と4人家族です。両親は共に移民の子で、ニューヨークに住んだ後にポストンに移り、私と妹が生まれました。父はハーバード大学医学部の小児科医で、子供の血液系の病気を専門としていました。母はピアニストであり言語学者であり教師でした。その関係で私は3歳の時から読み書きを教わり、6歳でピアノを弾き始めました。父の働く姿を見ていたことから、私は子供の頃に将来何になりたいか聞かれた時には、当然のように父のような医者になりたい、と答えていました。後に私は医者を目指し医学の研究者となりましたので、父の影響で科学の道に進んだこととなります。



ご両親

子供の頃の趣味といえば、本をたくさん読むこと、切手集め、それとピアノです。音楽はかなり真剣に取り組んでいました。そしてもう一つが鳥です。私は7歳の時、突然“鳥”に関心を持つようになりました。窓の外を鳥を見ている内にいくつかの種類を見分けられるようになったのです。ボストンは都会ですが、いつも夏の時期にはニューイングランドやニューハンプシャーなどの森で過ごしていましたので、森と親しむようになり、鳥の観察もたくさんするようになっていました。今も続けているバードウォッチングの始まりでした。鳥は夜行性の動物とは異なり日中に観察ができますし、そのさえずりで居場所も分かります。それと、多くの哺乳類が主に臭覚を使っているのとは異なり、人間と同じように視覚や聴覚という感覚器官を使う動物なので、人間は他の動物より鳥類のことをより良く理解できるのです。

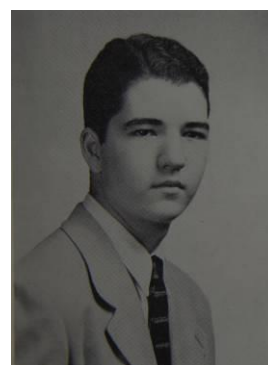
## 幅広い分野への興味

### <中学・高校時代>

中学・高校はラテン語の教育に熱心な男子校に入学し、ラテン語、ギリシャ語、フランス語などいくつかの語学を学びました。私の語学好きは言語学者で教師だった母と、この学校のおかげです。私は十代の頃から、ラテン語やギリシャ語、ドイツ語、スペイン語、フランス語の短編をよく読んでいましたね。

また、素晴らしい歴史の先生の影響で歴史も大好きでした。もちろん父の関係で科学にも興味がありましたので、私は本当に全ての教科が好きに関心を持っていました。それ以来、今でも

ほとんど全てのことに興味を持ち続けています。恐らくみんな子供の頃はいろんなことに興味を持っていたと思うのです。でも大人になって行く成長過程で、ひとつの事、ひとつの仕事に集中して他の事に関心を持つことをやめるよう促されていってしまいます。でも私はいろんなことに興味を持ち続けることを推奨されていたので、とても幸運だったと思います。私はそうして得たたくさんの知識や体験を妹に教えたり説明したりすることが大好きでした。鳥のこと、言葉の発音の仕方、今日の夕飯のこと、何でもです。それが、私が将来的に本を執筆したり、人に様々なことを説明したりする仕事につながって行ったのだと思っています。



## 医学と歴史・地理　そして環境

### <大学・大学院時代>

私は 1958 年にハーバード大学で生物学部を卒業し、翌年にはケンブリッジ大学大学院に入学し、生理学の博士号を目指して胆嚢の機能についての研究をおこないました。何故胆嚢の研究を選んだかという、実は私はとても手先が不器用で、学生時代にはシンプルなラジオを作るという課題もできないほどだったんです。そんな私でも使うことができる機器で研究できるのが胆嚢だったというわけです。しかし研究は失敗ばかりで大きな挫折も味わいました。幸いにも父の助言や周囲の協力のおかげで次第に研究成果をあげることができ、生理学の博士号を取得することができました。その後ハーバード大学医学大学院に進み、引き続き研究所で胆嚢の研究をおこない、最終的には医師の道ではなく科学の道に進むことにしたのです。

私は大学と大学院の 11 年の間に生理学の研究以外に、今のキャリアにつながる 2 つのことに強く興味を惹かれました。そのひとつが歴史と地理です。ケンブリッジ大学の時にはせっかくヨーロッパで暮らすならばイギリス以外でも生活したいと思い、ドイツで暮らしたことがあります。ドイツを選んだ理由は、世界一美味しいビールとワイン、音楽、そして最大の理由はアルプスの山登りです。この二十代前半の 4 年半ほどの期間に、イギリスとドイツで暮らしていた時の友人たちといろいろなことを語り合う中で、私は歴史と地理的な条件の違いによって、私とは全く異なる人生を歩んでいる人達が居ることを知りました。私はアメリカで育ちましたので、第二次大戦の時に爆撃など直接的に戦争の影響を受けることはありませんでしたが、ヨーロッパの人たちは違います。戦争の惨禍にさらされ、孤児になったり、父親が刑務所に入れられたり…、歴史上の出来事が人々の人生に大きな影響を与えていることに気づかされたのです。そのことで私は改めて歴史と地理に強い興味を抱くようになりました。



ニューギニアにて

ました。翌年には初めてニューギニアにも行きました。その頃から鳥だけでなく真剣に環境に関心を持つようになったのです。

そしてもうひとつが環境です。私は大学時代に友人と野外キャンプを始めるようになり、環境全般に興味を持つようになりました。ヨーロッパから帰国後の 25 歳の時には、友人と夏休みにペルーへ山登りに行き、そこからアマゾン川流域に下って熱帯雨林のジャングルを体験し

## 人生を変えた出来事と三部作のスタート

### <鳥とニューギニアと「銃・病原菌・鉄」>

1966年にはハーバード大学の研究所から UCLA 医科大学院に移りました。理由は、私の生理学の研究を高く評価してくれたことと、どうしても続けたかったニューギニアでの鳥の研究を認めてくれて、研究費用まで出してくれたからです。何故ニューギニアなのか。その理由は2つ。“冒険”と“鳥”です。

ニューギニアは今でも石器を使う伝統的な社会が残っており、危険な未開の地でもあり冒険心をそそる場所です。そして世界で最も美しいと言われる極楽鳥も生息しています。ひとたびニューギニアに来てしまうと世界の他の場所がとても退屈に思えてしまうのです。私は1964年に初めてニューギニアに行った時から50年以上経た今もニューギニアでのフィールドワークを続けています。1972年にニューギニアに行った時、私の人生を変えたと言ってもいい出来事がありました。ある浜辺を歩いていた時、ヤリという



ニューギニアで部族民と



名前のひとりのニューギニア人男性と出会いました。どこから来た？何をしている？何故鳥の研究をしている？等々、彼は私にありとあらゆる質問をしてきたのですが、最後に、何故ヨーロッパ人がニューギニアに来たのか？何故ニューギニア人がヨーロッパに行ったのではないのか？何故白人はみなメガネや鉛筆やカメラなどの荷物を持つことになったのか？何故ニューギニア人はそうではないのか？と聞かれたのです。どうしてテクノロジーや文明が世界のある場所で発達し、どうしてそれ以外の場所では発達しなかったのか？人類の歴史における最大の疑問です。私はその質問に対する答えを知りませんでした。それで考えるようになったのです。ヤリの言う通り“何故なのか”

と。そして私はその答えが歴史と地理に、起源や農業の違いにあるはずだと思い、調査を始めたのです。そうして長い調査の積み重ねの結果、1997年、「銃・病原菌・鉄」の出版することになったのです。60歳の時でした。私がこの本を書き上げた原動力は“好奇心”です。とにかくとても面白くて難しい疑問だったので興味深かったのです。この本は翌年ピューリッツァー賞を受賞しましたが、受賞はいいことばかりじゃないん

ですよ。実は私が生理学の研究をしながら鳥類の研究もしていることを私の昇給を決める他の生理学者たちは知らなかったのです。私がピューリッツァー賞を受賞したことを聞いた彼らは、私が胆嚢の研究以外にも何か別のことをしていることに気づいてしまったのです。大学と生理学部の中にはそれを快く思わない人たちが居て、私を昇進させることに反対する、というちょっとした問題が生じてしまいました。幸いにも学部長が私を支持してくれたので事なきを得た、ということがありました。

### <多分野の研究がもたらす知力と疑問>

私の今のキャリアは、生理学における胆嚢研究者ではなく地理学者であり環境学の研究者です。私はこれまでに様々な経験をしてきたことが今のキャリアに活かされていると思います。例えば、生理学の研究というのはひたすら屋内で実験することです。胆嚢を取り出してナトリウムやカリウムを含む溶液に入れて状態を計測し比較します。つまり胆嚢を操るのです。この実験は操作的実験と呼ばれます。

では鳥の研究の場合はどうでしょう。ジャングルの中で鳥を観察しながら鳥を操作することはできません。もしも操作したいとしたら鳥を捕まえなければなりません。これは非常に困難です。もちろん各国には鳥の捕獲に関する法律もあります。では鳥をどのように研究するのか？ 私は生理学研究でかつておこなっていた研究室で



の実験を経験に、自然の中の実験をおこないます。ある種類の鳥がいる山といない山を探して比較するのです。ナトリウム溶液の中の胆嚢とカリウム溶液の中の胆嚢の違いを比較するように、2つの山を比べることで鳥を操らなくても鳥の研究ができるのです。このように、多様な対象を研究することは大きな利点があります。より多くの物事を知っているということは、何かを解釈しようとする時に、別の知識を考えの中に加えることができるからです。

例えば、日本は中国沖合の島国です。イギリスはフランス沖合の島国です。そう考えると2つの国は同じような歴史を持っているだろうと思うのですが、そうではありません。全く違った歴史を持っています。イギリスは常にヨーロッパ大陸と頻繁に関わってきた歴史があり何度も侵略されています。しかし日本は2000年以上に渡って大陸に侵略されたことが一度もないのです。何故両国は違うのでしょうか。例えば、何故農業が中国で最初に発達して後に日本に伝わったのか、何故逆にはならなかったのか、このような疑問は、もし私が日本の歴史だけに興味があり学んでいるとしたら2国の歴史を比較して

みようという思考には至らなかったでしょう。言い換えると、いろいろなことを知れば知るほど疑問も湧き、そして疑問に思ったどんなことにも対応できるようになるのです。私がいろいろなことに興味を持ちすぎだと批判する人が居たとしたら本当に愚かなことです。様々なことに興味を持つことは全く正しいことなのです。

もちろんそういう私でも興味のないことはいくつかあります。株式投資などお金を稼ぐためだけにするようなことや機械を使ってやるようなことはあまり好きではありません。コンピューターで作業することに全く関心がありません。それともうひとつ、自宅の庭仕事ですね。

### <文明と環境問題>

「銃・病原菌・鉄」を書き終えた時、私には既に新しい興味深い疑問がありました。それは、何故崩壊する文明とそうでない文明があるのか？ということでした。私は、何故日本は何千年も発展した社会を持っていて崩壊したことがないのか、何故マヤ文明やイースター島の文明は崩壊したのか、何故東南アジアで最も強力だったクメール帝国は滅びたのか、そんな疑問です。

私は興味を持った事柄に対して2つの取り掛かり方をします。ひとつは、その疑問・テーマについての専門家が誰なのかを調べてその人に話を聞くこと、もうひとつはその関



3部作

連の書物や論文を読むことです。そうして疑問に対して調べて行く中で、少なくとも仮説ができるまで続けます。これが自分の出せる最良の推察だと言えるまで続けるのです。こうして疑問へのアプローチを続け、社会が崩壊する大きな理由は、知性の問題ではなく環境問題であったことが分かったのです。例えば、日本は徳川時代に森林の問題に直面していましたが崩壊はしませんでした。何故ならば森林を上手に管理する方法を学んでいたからです。鎖国状態の日本では木材を自給する必要がありました。

そこで国内の徳川直轄地に何本の木があるのか、それらの木の大きさは？手入れの仕方は？森林を維持するために切ってもいい木は何本までか、マニュアルを作り持続可能な形で管理をしていたのです。しかし、クメール帝国は森林の管理はできていませんでした。その他にも気候や水の問題も抱えていたのです。では今日の私たちの社会はどうでしょう。クメール帝国と同じように森林、気候、水の問題を抱えています。我々はそうした歴史から何を学ぶことができるのでしょうか。2005年「文明の崩壊」を出版し、

そこに 12 項目の環境問題を示しました。その中には気候問題も含まれています。人類にとって大きな問題であるにもかかわらず何故国際条約は気候問題を解決できないのでしょうか。

まずスタートとして、気候が本当に全体的に温暖化していることを実証するのにとても長い時間がかかり、そして今でもまだそれを信じていない人たちが居ます。何故温暖化が引き起こされていることを納得させられないのか、そのひとつは証拠が直接的なものではないからです。私が今何かに火を点けたら世界の温度が1度上がるわけではありませぬし、火を消したからといって世界の温度が下がるわけではありませぬ。証拠はもっと間接的なもので複雑であるということです。その他にも、我々は化石燃料を使い続けている、ということもあります。そこには利権の衝突という側面があり、化石燃料を燃やすことによって多くの利益を得る人たちがたくさん居るのです。では私たちが環境問題を解決すべく前へ進むにはどうしたら良いのでしょうか。それは人々がきちんと話し、気候問題や環境問題の解決を支援する政府に投票することです。それに反対する政府に投票しないことです。それが、私たちができることの全てです。

### <異なる社会と危機管理>



「文明の崩壊」の出版後に私が興味を抱いて次に取り組んだテーマは、“伝統的な社会から何か学べることがある”ということでした。私は長年ニューギニアでフィールドワークをした経験と体験の中から、子供の育て方に対する考え方を学びました。他の人はニューギニアの別な点や部族社会から何か新しい考え方を学ぶかもしれません。私はこうした伝統社会や部族社会、又は国ごとに異なる社会というのはそれぞれ違った人間社会の大きな運用実験だと思っています。それぞれの社会にはそれぞれのやり方があります。例えば芸術への支援や保険のシステムなどはアメリカよりもドイツの方が優れています。同じように日本よりアメリカの方が優れていることもあります。伝統社会もそれぞれに異なるやり方があります。始まってしまった戦争をどう終わらせているのか、子供をどう育てているのか、老人をどう世話しているのか、他の社会に優れているところがあったら、我々はそれを学んで危機を回避することができるのです。それが 2012 年に発表した「昨日までの世界」で導かれた結論でした。



## 未来へ向けて

これからの私たちの未来に向けてすべきことは2つあると思います。ひとつは持続可能な世界を目指すこと。持続可能な世界とは、資源が新しく作られるのと同じ速度で資源を収穫する世界のことです。森林や漁場、淡水、土壌などは再生可能な資源です。一方、化石燃料や金属は再生不可能な資源ですが、金属はリサイクルできます。化石燃料は新たな化石燃料を生み出すことはできないので、今後私たちがすべきことは、多くのエネルギーを太陽光や風力など再生可能な資源から得られるようにすることです。そしてもうひとつは、何が未来にとって最善か？ということをお問わないことです。それは未来にとってベストなことが一つであるという仮定に基づいているからです。未来にとって必要なことはとてもたくさんあります。ひとつだけではないのです。大気を守り、世界の人口に食料を供給し、戦争・核戦争を防止しなければなりません。そうしたことを全て行わなければならないのです。例えば、環境に気を配り気候変動を解決したとしても、核戦争が起こってしまえば私たちはお終いです。また、核の問題を解決できたとしても温暖化が進み大気がどんどん高温になって行ったら私たちはやはりお終いなのです。“何が世界で一番大きな問題なのか”と考えて探すこと。まずその発想をやめなければなりません。世界中には相互に絡み合った多くの問題があつて、そこには優先順位は無いのです。

## 家族への想いとこれからの目標

妻のマリーとは友人の紹介で出会いました。私たちはそれぞれ離婚経験者でしたが、私の友人の奥さんがマリーと共にロサンゼルスで臨床心理学を勉強していた仲間で、友人夫妻が、私とマリーがとても似合いの2人だと思い夕食会を開いてくれたのです。この夕食会がきっかけで互いに好意を持ち、お付き合いを重ねて再婚することになりました。2人ともユダヤ人なのでユダヤ教の祭司（レビ）のもとで自宅の庭で結婚式を挙げました。マリーと私はいつもお互いに助言を求め合っています。私の方がちょっと多いですかね。人間関係で何か問題が起こった時でも、何かを決めなければならない時でも、“私はどうしたらいい？”と妻に相談します。「銃・病原菌・鉄」という本のタイトルもマリーの助言によって決まりました。1987年には双子の息子に恵まれました。それまでは私は鳥に関する専門書しか書いていませんでしたが、子供たちが生まれて、この子た

ちが 50 歳を迎える 2037 年には世界は一体どうなっているんだろう、ということを考えてたのです。彼らは良い人生を送るのか、それとも悪い人生を送るのか？世界はどうなっているのか？それを左右するのは“胆嚢”ではありません。“環境”です。

それで私は胆嚢に関する本ではなく、環境問題に関する本を執筆しようと思ったのです。今年出版した「危機と人類」という本のテーマは、国家がいかに関機に対応するか、ということです。その観念は妻の仕事とも通じています。臨床心理学者であるマリーは、危機に瀕している人々を助ける仕事をしています。マリーは危機に陥った個人がどのようにしてそれに対応しているのか、自分自身にどのような変化をもたらして危機に対処をしているのかということをお教えてくれます。「危機と人類」の枠組みは国家的危機を個人的危機と対比して捉えるところにあるのです。因みに「危機と人類」（原題：「Upheaval」）もマリーと 2 人でひと月ほど悩んで一緒に決めたタイトルなんです。今後の目標はまた新しい本を書くことですが、その他にも、ニューギニアで鳥の研究を続けること、大学で教えること、バッハのカンタータを研究すること、ピアノをたくさん弾くこと、イタリア語やドイツ語を練習し続けること等々いろいろあります。そして一番は、妻や子供たちと多くの時間を過ごし、一緒に旅行に行くことです。これまでの人生を振り返って、本の出版や鳥の研究などいろいろなことに興味を持ち続けることができたのは運と共に、自分で努力し、両親や良き師に恵まれたおかげだと思っています。とてもいい人生を歩ませてもらいました。そして私の人生で最高だったことは、マリーと子供たちを幸せにする手助けができたことです。



奥様と双子の息子さん



自宅近くでバードウォッチング